**P101**

**第二章**

**透すもの 遮るもの**

 よいすまい・わるいすまいという比較は、一体、なにを基準にしてしたらよいのか。ある人は いうかも知れない。

 ーー数寄を凝らした立派な普請だ……。たしかに、こうした価値判断の基準もある。

 また、ある人はいうかも知れない。

 ーー坪数のわりに安く建った……と。すまいの経済性は、特に現在は、価値の重要な要素であるといえる。

 しかし、この二つの価値判断も、すみやすいという点を無視して行われるわけにはゆかないだろう。

 すみにくいということは、すまいにとって致命的な欠陥である。

 では、なにが、すみよいということであり、なにが、すみにくいということであろうか。

 趣味性や好みといった個人差のあるものは一応除外して、ほぼ生理的ともいえるすまいの快適性を、列挙し、それを通じて、すまいの居住性を検討してみることにしよう。

P100

**SH—39の構造**

 三鉸接ラーメンによる組立て式の構造である。

 これもSH—19と同様、平面計画や視野をさまたげる**すじかい**をなくすと同時に、現場で簡単にボールトで組立てられる構造として考えられた。

 柱はピンの場合にくらべると大分太くなっているが、数が比較的多いので上からの重さに対しては、大して負担にならない。**ラーメン**ならば、**すじかい**を取り除くことができる一つの例である。

P108~109

 床からテラス、テラスからさらに庭へ続く広々とした空間は、この家の主なテーマでもあり、特長にもなっている。

 地面に接する低い床は、高い床に住みなれた人達にとって、多少不安な感じを持たせることもあるようだが、広い敷地に広縁をめぐらした豪華邸ならいざしらず、狭い敷地に小さい家という近代的な生活では、敷地全体をすまいとして活用するために、視線のさまたげになったり、歩行動作の障害になるような仕切りはできるだけ取りのぞいて、外も内も一つに溶け合えるようなすまいであることが、生活をエンジョイするためにも望ましいことであろう。

 このようなすまいをつくるためには、床ばかりでなく天井もまた一と役買っていて、小壁ランマなどの視野をさまたげる障害は除かれ、天井の拡がりが終わるところまで部屋の大きさを感じさせている。

 連続感と開放感、それに庭と部屋の連がりを一層積極的に押し進めるために、最小限に必要な出入口を除いて、大きな一枚硝子の窓、庭の効果を一層高めるために配置されている飾りのない単純な壁、平らな天井をさらに広く見せるための低いダンロが据えられている。

 この家のが、完全空気調整の冷暖房を備えていることも、これらの目的をさらに完成したものにするために必要であったからで、動かす必要のない、それ故思い切り大きくとられている硝子窓や、通風などには無関係に部屋と庭のつながりと効果的な演出だけを考えて作られる壁など、都心にはまれな環境とともにすまいを一層豊かにしている。

 冷暖房はたしかに費用のかかることにはちがいないが、埃や音をはじめ避暑避寒の必要もなくなり、一年を通じて室温が一定だということは、生活の合理化や単純化が容易になるので、得ることも多いのではなかろうか。

P110〜111

**広びろとした空間は、どういう方法でつくられたか**

**床と天井**

 こうした連続空間を作るためには、基礎のコンクリート打から充分綿密な計画を立てて進めなければならない。

 目的を得ようとさるためには結果だけを求めても効果がない。まず最初の計画が結果を左右するものと考えて間違いない。

 これまでの写真で見られるように、庭から内、内から庭とけじめなく連続する床は、コンクリート床を造るときに、それをどの程度の高さにするかということや、床にはどんな設備をしておかなければならないか、などをあらかじめ最終の効果を考えながら決めてある。

 下の写真の中央部に見える細い溝は、暖冷房のためのダクトで、この中もコンクリートで作られ、フォームグラスで断熱をした上を、コンクリート板の蓋で床と平らに塞がれる。

 次項の写真は鉄骨も組み上り、天井が貼り上った状態で、この建物の主要な目的であった〝平らな床と平らな天井による広々とした空間〝がよく現されている。

 この天井と床のあいだに適当に壁が嵌め込まれて、すまいの空間がつくられる。さらに嵌め込まれた壁をはずせば、再びこの状態が得られるので、改造や変更が自由にできるように設計されている。